



『魔道祖師』・『陳情令』と 中国文化ナショナリズムの拡散

すずき かずこ
鈴木 和子

●テキサスA & M大学 社会学部 准教授

『陳情令』という、中国ドラマがある。2019年に、中華人民共和国の動画配信サービス、テンセントにより放映されたWEBドラマシリーズで、中国でのドラマ再生回数No.1となった大ヒット作である。その後、日本を含めたアジア諸国でも人気を博し、最近ではThe Untamedというタイトルで、米国のAmazonプライム会員なら、無料で全50話が視聴できる。主人公二人の男性同士の恋愛を描いた『魔道祖師』という、時代モノ中華ファンタジーBL小説を原作としたものだが、ドラマやアニメには同性愛要素は取り除かれて物語が展開していく。筆者は、フェミニズムとBL小説の関係なども研究テーマとしており、最近ジェンダーやLGBTQ関係の講演・授業をすると、このドラマやアニメはBLではないのに、よく話がでてる。困ったことに、筆者は日本で漢文の読み方は習ったが、現代中国語はさっぱりわからない。質疑応答やインタビューなどでいろいろ聞かれても、原作を読んでいないので明言は避けたく、弱り切っていたところ、今年の6月末ようやく原作の日本語訳が発売された。現在、日本から取り寄せ中である。

米国であまり頻繁に聞かれるので、とりあえず（BLではないけれど）職業意識上、ドラマの『陳情令』やアニメの『魔道祖師』をしてみることにした。正直、実写ドラマは原作のイメージが壊されることが多いので、滅多に見ない。なので、『陳情令』も意識的に敬遠していた。ところが、嫌々見始めたのに、数話も終えないうちにアニメ・実写ドラマ共に、まんまとはまってしまった。これが非常に面白い。キャスト、特に主人公二人が秀逸だ。快活で自由奔放、でも情に厚い魏無羨（ウェイ・ウーシエン）と無口で戒律を重んじ己にも厳しい藍忘機（ラン・ワンジー）という対照的な主人公が徐々に絆を深めていく様子を、肖戦（シャオ・ジャン）と王一博（ワン・イーボー）

が演じた。割れた腹筋に象徴された肉体的な男らしさを規範とするハリウッドの男優たちと一線を画し、文武両道でありながら適度に耽美要素を持ち合わせた男性性の表現は、彼らを一気に国際的なスターに押し上げた。米国におけるアジア系男性性は、ブルース・リーのような拳法の使い手で殺人マシーンでなければ、極端に女性化されたゲイやオタクといったステレオタイプで描かれることが多いので、このようなアジア的美しさを兼ね備えた男性性がメインストリームで評価されるようになったのは、ある意味快挙である。

日本語版のドラマのキャッチコピーは「行く道は違えど、同じ義に生きる」。このコピーから窺われるように、二人の主人公が唯一無二の友として深い絆を築いていく様や、彼らを取り巻く男性キャラクターたちとの関係は、限りなくホモソーシャルである。ホモソーシャルとは、恋愛または性的な意味を持たない、同性間の結びつきや関係性を意味する社会学や英文学の用語で、友情や師弟関係などがこれにあたる。最近のジャンル類型では、ブロマンスともいう。知らないひとは、とりあえず、太宰治の『走れメロス』のメロスとセリヌンティウスの友愛や、『駆込み訴え』のユダのキリストに対する愛憎関係を思い出していただければ、なんとなく想像がつくと思う。

物語の展開は時系列ではなく、世界観が古代中国風なので、人物の名前も実名のほかに字（あざな）など、色々な言い方が出てくる。従って最初の数話のハードルが高く、そこで止めてしまう人もいるらしい。そのせいか、ネット検索をすると、そこで辞めないように訴えかけ、ネタバレしないように丁寧に物語を解説してくれるサイトもあるらしい。幸い、筆者は中国語と英語の字幕が一緒に出てくるヴァージョンを見たらうえ、もともと『三国志演義』や『十八史略』などが好きなので、そこはあまり難儀せずすんだ。



ドラマ『陳情令』の主演二人（左）とアニメ『魔道祖師』の主演二人（右）

出典：<https://kai2cents.wordpress.com/2019/09/15/the-untamed-%E9%99%88%E6%83%85%E4%BB%A4-drama-review/>（左）

<https://weatheringwithyoufilm.co.uk/madousoshi/>（右）

簡単にあらすじを紹介すると、この世界では妖魔や邪鬼が跋扈し、人々を脅かしている。それらを退治するのが仙師と呼ばれる修行者たちで、彼らはそれぞれ違う一族に属している。これを「仙門百家」と呼び、中でも特に優れた仙門が五家（藍氏・江氏・聶氏・温氏・金氏）あり、これら五大世家によって世の秩序は保たれていた。ところが、温氏が強大な力を手に入れることによって世の中は乱れ、他の四家が結託し戦いが始まる。江家の仙師、魏無羨の鬼道によって勝利をおさめるが、皮肉にもその強大かつ負の力故に、仲間より恐れられ、討伐を受け死亡。その16年後、呪術によって蘇った魏無羨は、かつて共に戦った藍忘機と再会する。二人は新たな事件の真相にたどりつくつと、それが16年前の出来事に繋がっていることに気づく。

このドラマを見て筆者がまず驚いたのは、BL原作がいかにかに人気があったとはいえ、検閲が厳しい中国で、例えBL表現抜き（つまり直接的な恋愛表現を除く）としても、よくそれを実写ドラマ化したなという点。日本でいえば、NHK大河ドラマの脚本にBL作品を使用するような感じではなかろうか。ちょっと、想像がつかない。ダイバーシティやインクルージョンを意識して、よしながふみ原作のゲイカップルの日常を描いた『きのう何食べた？』や、田亀源五郎のゲイ・コミックス『弟の夫』の実写ドラマ化とは全く訳が違う。「中国、なんだかわからんが、大胆だな」という、妙な感心をしてしまった。そして、ひとしきり感心すると、日本人として「中国に負けたかも？」的な、猛烈な悔しさがふつつつ湧き上がってくる。日本の文化ナショナリズムの拡散に、日本文化論が果たしてきた役割は大きい。1980年代、日本がバブル経済を謳歌していたころは日本の会社経営方法などについて、そして平成大不況以降はアニメなどの（サブ）カルチャー・コンテンツに

関して、日本の知識人や文化エリートが、日本文化を代表するものとしての言説を生産し、世界がそれを消費・再生産してきた。そして、私自身も、アジアを代表するソフト・パワーとして、日本はまだまだ「イケてる」と思っていた。しかし、『陳情令』のような実写ドラマを見せられた後では、どっと不安が押し寄せる。

中国は支配民族の漢民族を含め公的には56の民族からなる多民族国家だ。そのため、経済大国としての地位を固めた中国にとって、国際社会にも世界中に拡散した「中国人」ディアスポラにも訴求力のある、漢民族を中心とした文化的な「中国」のイメージを確立することが急務であった。そこで、米国では、中国政府がスポンサーとなった「中国という国」のイメージ・コマーシャルを流したり、中国の古典・民族舞踊を披露する舞台芸術団「神韻」が様々な米国メディアを通じて喧伝されたが、どれも今一つだった。はっきりいうと前評判ばかりで、思ったよりショボかった。

ところが、『陳情令』では、現代人でも魅了される劇中での華麗な衣装や楽曲が、あたかも「伝統的な中国」であるかのように創造され、愛国心・義・礼などといった儒教的精神が、現代の文脈でも通じるように「伝統」として再解釈されている。つまり、現代的な価値観と調和させながら、国境を越えて視聴者の琴線に触れる「伝統的な中国文化」の発信に成功したといっても過言ではない。日本では、2000年前後に「陰陽師ブーム」があり、安倍晴明を主人公とした夢枕獏の小説『陰陽師』や、岩崎陽子の少女漫画『王都妖奇譚』などが実写化された。残念ながら、米国では全然話題にならなかった。韓国は米国のエンタメ界に徹底的に迎合する形でそのソフトパワーを示したが、BLさえ利用する中国の「伝統の創出」によるソフトパワー戦略は、イデオロギーとしての中国文化の拡散に、今後重要な役割を果たすであろう。